



# 複眼的 日本語 研究

## 敬遠される 日本語の一人称

日

本国内に住む人で、日本語以外の言語を日常的に話している人は、数多くいる。世界的に見て、異民族や少数民族の

言語は、二種類に分けることができる。一つは、多数の人々が来る以前からいた集団だ。南北アメリカのインディアン、オーストラリアのアボリジニー、日本のアイヌなどが思い浮かぶ。もう一つは、後から来たいわゆる「移民」だ。日本の場合は、朝鮮半島の人々、華僑、ブラジル人などが挙げられる。こうした異民族コミュニティの言語の使い分けやバイリンガリズム、彼らが使用している日本語の特徴といった課題は、当然、日本語教育と深く関係している。

一方、日本国外でも、日本語と他の言語を両方使って生活している人々がいる。海外に移民した日系人やその子孫、旧植民地に住む人々など、さまざまなケースが思い浮かぶが、ここでも現在の日本語教育で応用可能な事実・情報・発見があるように思われる。一つの例として日

本語の人称代名詞について考えよう。

以前ここで紹介した小笠原諸島の欧米系島民が話す日本語では、一人称として *me* が使われており、二人称は *you* だ。島民は外部の人間としゃべるときにはワタシ、オレなどを使うから、日本語の単語を知らないわけではない。彼らにそのわけを聞くと、「日本語の人称代名詞は複雑すぎる、いちいち考えて選ぶのは面倒くさい」とはつきり言う。ちなみに、複数形は英語の *me* ではなく、日本語の「ら」が付いて *me-ra* となる。所有格も *me* などの英単語ではなく、「*me no book*」などと言う。しかし驚くことに、小笠原と全く縁のないカナダ西海岸のバンクーバーと東部のトロントの日系コミュニティでも、日本語の一人称として *me* が使われている。ハワイの日系人の間でも同様の使い方が見られる。これはただの偶然なのだろうか。

また、大阪大学の簡月真さんが台湾で継続的に行っているフィールドワークでも、似たような現象が見られる。閩南語(台湾語)を母語とするお年寄りが日本語を話す時、一人称にワタシやオレではなく閩南語の一人称 *soa* を使うこと

### 第 9 回

日本語教育現場が抱える  
さまざまな問題を解決する糸口が、  
日本語が長期的に使われている  
多言語コミュニティの状況に秘められているかもしれない。  
これから、その可能性をもっと探らなければならない。

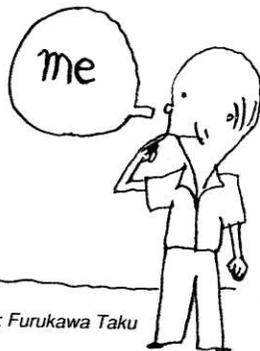


illustration: Furukawa Taku

がわかった。一方、原住民のアメリカ族やブヌン族は互いの母語が通じ合わず、中には閩南語も北京語も話せないため日常的なコミュニケーションをいまだに日本語に頼っている人がいる。驚くことに、その人たちの日本語でも一人称がほとんど goa となっている。閩南語ネイティブだけでなく、閩南語が話せない原住民の日本語にも goa が取り入れられているのだ。同様に二人称は ㄹ が使われる。小笠原やカナダ、ハワイで使われる goa と異なるのは、屈折の場合だ。例えば、複数形の場合、閩南語の複数形 ㄹ がおのまま使われるし、所有格も閩南語の文法に従い、goa(私)と ㄹ(あなたの)になる。

また、古くから横浜に住む華僑たちの日本語には、中国語の ㄹ が頻繁に使われていることが最近、東大の野村和之さんの研究で明らかになった。二人称も中国語の ㄹ が使われている。この横浜チャンポン語の場合も、台湾と同様、複数形は原語の形、つまり中国語の ㄹ men、nimen になっている。さらに、ロシア北東部のサハリン州における日本語の残存状況を調査している朝日祥之さんの研究では、そこに住む朝鮮系のお年寄りが日本語を話すとき、ロシア語の一人称 ㄹ が使われていることがわかった。どうも、小笠原以外のバイリンガル社会でも日本語の人称代名詞が避けられている感じがする。

以上の例から、日本語と他の言語が使われているバイリンガルコミュニティで日本語の一人称の使用が避けられることがわかるが、これは、日本語教育現場で仕事をしている私たちとどう関係しているのだろうか。ここまでの話の応用

法をちょっと探ってみよう。

一つには、「私の授業を受けている学生は日本語の一人称の使用・選択で迷っているのではないだろうか」と考える必要があるかもしれない。長期的に日本語を使っている上記の言語コミュニティでさえ日本語の一人称の使用が面倒くさいのならば、短期間しか日本語と接していない学習者は、なおさら悩んでいるかもしれない。授業で「ワタシ、ワタクシ、アタシ、ボク、オレ、ワタシタチ、ワレワレ」などの特徴や使い分けについて説明したつもりでも、学習者にとってその情報を一気に吸収するのは難しいだろう。どうだろう、周りの初・中級の男性学生で「オレ」を「大人の男性の使うことば」だと解釈し、フォーマルな場面でも「オレ」をやたらに使う人はいないだろうか。異性の教師と話すときに「アタシ」を連発する学生はいないだろうか。あるいは、同年の男性友達と話すのにも、自分のことを「ワタシ」と言って変な目で見られている男子生徒はいないだろうか。

代名詞の使用は敬語のそれと似ているところがあるだろう。日本人はよく「日本語の敬語は難しいだろう」と言うが、日本人にとって難しいと感じるのは、おそらく「拝見する、見る、ご覧になる」のような語彙、あるいは「社長はおりません」などの謙譲語の問題だろう。しかし、実は、我々外国人学習者にとって、それ以上に頭を悩ませるのは、こうした文法的問題よりも、ゼミのコンパで一緒になった八歳年上の先輩に向かって敬語を使うべきかどうかという、相手や場面をめぐる問題なのだ。

## Daniel Long

PROFILE

ダニエル・ロング

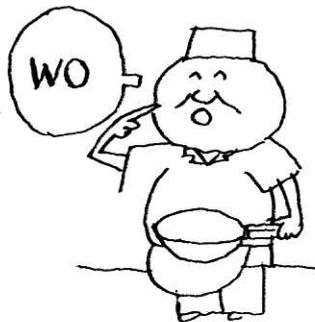
1963年、アメリカ・テネシー州生まれ。

1982年、関西外国語大学、国際基督教大学へ留学。

大阪大学大学院修士課程・博士課程修了、博士号(文学)取得。

1991年から大阪樟蔭女子大学日本語研究センター講師、助教授。

1999年から東京都立大学人文学部助教授(国文学研究室)。



2003  
TAKUM FURUKAWA